

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-151	A-137	16-078 滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)		
<p>Association between alcohol drinking behaviour and cognitive function: results from a nationwide longitudinal study of South Korea. 飲酒行動と認知機能の関連について:韓国の全国的縦断研究から</p>		
執筆者		
Kim S, Kim Y, Park SM.		
掲載誌		
BMJ Open. 2016 Apr 26;6(4):e010494. doi: 10.1136/bmjopen-2015-010494.		
キーワード		PMID
飲酒、認知機能、中高年、縦断研究		27118285
要 旨		
<p>目的: 韓国の中高年において大量飲酒などの飲酒行動が認知機能に与える影響について調査した。</p> <p>方法: The Korean Longitudinal Study of Aging から、2006年のベースライン時に通常の認知機能(韓国版 Mini-mental state examination (K-MMSE)のスコア\geq24)であった45歳以上の5,157名を対象とした。飲酒行動はCAGE質問票を用いた(2項目以上で問題飲酒と定義)。2006年のベースライン時の飲酒行動と2006年から2012年の認知機能の低下の関連について検討した。</p> <p>結果: ベースライン時に問題飲酒があった群は、なかった群に比べて、6年の追跡期間中の認知機能の低下が速く($p<0.05$)、特にベースライン時に正常下位(K-MMSE score 24-26)であった群で顕著であった($p<0.05$)。ベースライン時に正常下位で、問題飲酒があった群は重度の認知機能低下(K-MMSE score \leq17)と有意に関連していた(調整オッズ比 adjusted odds ratio: aOR=3.76, 95%CI 1.46-9.67)。さらに、男性では、禁酒群は問題なし飲酒群に比べて、重度の認知機能低下と関連していた(aOR=1.62, 95%CI 1.09-2.39)。</p> <p>結論: 本研究は、問題飲酒は認知機能低下のリスクであることを支持する。今後の研究でより強い根拠が明らかになるかもしれないが、アルコール乱用への介入が認知機能低下の予防につながるかもしれない。</p>		